

おわりに

本研究は、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターのプロジェクト研究「音曲技法書（伝書）の総合的研究」（二〇一八―二〇二二）のメンバーによる研究成果の一部分を、書物としてまとめたものである。日本伝統音楽研究センター（伝音センター）研究報告十四として、これを刊行する。

出版への途上、複数の研究プロジェクトそしてその構成員の方々に、ひろくかかわっていただいた。以下に紹介する。

本研究の出発点となる二〇一八年一月二五日の能（羽衣）の上演は、もともとは、編者（藤田）がメンバーとして所属する**伝統音楽普及実行委員会（代表、河村晴久氏）**による事業「**能は面白い**」として計画された催しであった。伝統音楽普及実行委員会は、学校教育に能楽を導入するための方法を様々な角度から考案し、提供するための組織である。二〇一八年度は、高校の教科書に載っていた（羽衣）をテーマとして教材を考案し、能（羽衣）の上演を含む教員用講習会を、独自に実行する計画であった。その催しの計画に、編者は、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターとの共同主催を持ちかけ、録画された映像のインターネット公開、さらに、その全体の楽譜化と、楽譜の公開を提案した。それに対する、伝統音楽普及実行委員会のみなさん、そして、当日に出演してくださった能楽師のみなさんの快諾がなければ、本研究の開始は不可能であった。まず、感謝を申し上げたい。

その後、楽譜化や演出研究のあり方について考えていく過程で、**法政大学能楽研究所「能楽の国際・学術的研究拠点**」による共同研究に「**能楽の映像に添える記譜の研究**」というテーマで応募できた。そして二〇一九、二〇二〇年度の二年間、採用していただいた。この研究の枠の中では、囃子方やシテ方へ、演奏にかんするインタビューを行い、法政大学に所蔵されている羽衣の型付、さらに関連する音楽伝書の調査をすすめ、現代の演出との比較をおこなうことができた。これが、本研究の第二部、そして第三部の縦書き楽譜の注釈記述の基礎として生かされることになった。その共同研究の成果発表の一つが、二〇二〇年一月二五日に開催された能楽学会主催の**能楽フォーラム「記譜を通じて能の面白さにせまる**」（オンライン開催）の開催である。本書の第二部のほとんどは、このときにおこなわれた口頭発表に基づいている。

またこの間、編者自身は、**科学研究費基盤研究C「日本の中世芸能の記譜法を新たに考案する―謡曲・声明・民俗芸能**」というテーマで助成金をえて、研究をおこなうことができた（二〇一八―二〇二二年度）。交付金の一部分は、本研究の中の羽衣の楽譜作成、とくに楽譜の入力作業や校閲作業、楽譜データの映像への貼り付け作業にも使われている。

本体の日本伝統音楽研究センタープロジェクト研究「音曲技法書（伝書）の総合的研究」（二〇一八―二〇二二）において、本書にいたるまでの「羽衣」楽譜化の研究がはじめたのは、二〇一九年の夏である。最初に取り組んだのは、縦書き楽譜の作成である。その研究や作業の過程については、本書三―一の中の「二、総譜作成の過程」に示したとおりである。楽譜化の着想から完成までには、およそ二年の期間を要したが、ノウハウはわかってきた。もしまた、同じことを別の曲で試みる機会があれば、もっと

短時間で完成できると思う。

「はじめに」に記したように、本書は、映像の能（羽衣）とその楽譜（縦書き、横書き）をテキストとする研究、それらのテキストなしには、そもそも成り立たない研究である。その意味で、映像を撮影・編集してくださったエイキョービデオの清水元美氏に、ここに感謝の言葉を述べたい。また京都市立芸術大学の非常勤講師で、日本伝統音楽センターの情報管理担当の東正子氏には、映像の編集、映像と楽譜のタイミング合わせなどの作業で、お手間をかけていただいた。楽譜の貼り付けや映像全体についても、美術家としての立場から、適切なアドバイスをいただいた。同じく、ここに感謝申し上げる。同じく、編集、構成の過程で協力してくださった京都芸大日本音楽研究専攻の大学院生のみなさんにも感謝したい。

最後になるが、入稿から完成までの間、緻密で的確な作業を続けてくださった、田中プリントの山形将章氏に、心より感謝申し上げます。

令和四年（二〇二二）二月

藤田隆則 記す